

イデオロギーと現実の言語使用の差異に対する意識化

— 日本語学習者の語用論的能力育成につながる活動 —

Bridging the Divide Between Ideology and Actual Language Use: Activities for the Development of Japanese Language Learner Pragmatic Competence

アンドリュー・バーク
Andrew Barke

嶋津 百代
Momoyo Shimazu

In this research, we conducted a survey on Japanese language learners' knowledge and depth of understanding of the use of *desu/-masu* and plain forms. While traditional accounts have pointed out the distinction between ideological rules and actual use, we attempted to raise learners' awareness of the difference by conducting activities in which examples of "non-stereotypical" type language use that deviated from the normative stereotypes were introduced.

For comparative purposes, we also asked Japanese university students to complete a questionnaire on their understandings of the use of *desu/-masu* and plain forms, and then participate in the activities held for Japanese learners.

Our data comes from: (1) a written questionnaire completed by both Japanese and international students, (2) discussions between pairs of Japanese and international students, (3) discussions among groups of two Japanese and two international students, and (4) a follow-up questionnaire survey completed by group discussion participants.

Key points that emerged from the data include: both Japanese and international students became aware (1) of the importance of appropriate *desu/-masu* and plain form use within one's group, (2) that *desu/-masu* and plain form use is closely interlinked with language ideologies, and (3) that rather than use of *desu/-masu* and plain forms being determined by consideration of the social context and discourse participants, speakers make active and strategic choices in their selection of the forms.

Keywords:

ideology, language use, pragmatic competence, *desu/-masu* forms, learners of Japanese as an L2

1. はじめに

第二言語／外国語学習者のコミュニケーション能力の一要素として語用論的能力が注目されるようになり、その習得過程および指導に関して、これまで研究が積み重ねられてきた (Kasper, 1997; Taguchi, 2009)。語用論的能力とは、簡潔に言えば、ある社会的文脈において適切に言語を用いることができる力である。

日本語教育においても、学習者の語用論的能力の育成のために、日常会話で用いられている言語形式や言語表現が教材に取り入れられるようになってきた (Jones & Ono, 2005; 清水, 2018)。それにもかかわらず、教室内で教えられている日本語と、教室の外で遭遇する会話で用いられる日本語には齟齬があるという意見をよく耳にする (Iwasaki, 2011)。その理由として、以下のような点が考えられよう。

- (1) 日本語教室では、文型・文法積み上げ式に代表されるように、容易な文法構造から難易度の高いもの、また、日本語の語用論的側面よりも文法的側面を指導することが主流となっている。初級レベルでは、カジュアルな言語形式や言語表現よりも、丁寧でフォーマルな形式や表現が優先的に指導されている (Ishida, 2009)。会話の相手に失礼な振舞いと見なされたり誤解されたりするのを避けるために、カジュアルな言い回しよりも明らかに丁寧に聞こえる言い方を身につける方がよいという考えもあろう。
- (2) 日本語学習者が日本語母語話者との会話を最初に経験するのは、公の場よりも私的な場であることが多い。例えば、クラスメイトやホストファミリー、アルバイト先の上司や同僚との会話である。そのような会話では、教室では指導されないような、カジュアルでインフォーマルな形式や表現が用いられることもあるだろう。
- (3) 日本語学習者対象の教科書には、日本語の語用論的側面に関して十分説明されていないことが多い (清水, 2018)。説明されていたとしても、特定の文脈における特定の話し方や、一般的でステレオタイプ的な規則に基づいた説明で終わっている。日本語の会話では、往々にして典型的なものではない言語使用が見受けられることもあるが、そのような例についてはほとんど説明されていない。

本研究は、以上で挙げた点に鑑み、日本語学習者の語用論的能力を育成するためには、日本語の指導の抜本的な転換が必要であるという問題意識から出発している。そして、日本語の初級レベルで扱われる「です・ます体」と「普通体」の使用を一例として取り上げ、まず、日本語学習者が「です・ます体」と「普通体」の使用に関してどのような知識を持ち、どの程度理解しているかを調査した。従来の伝統的な指導では、ステレオタイプ化した言語使用とイデオロギー的な規則が強調されてきたと言えるだろうが、本研究では、そこから逸脱した「非ステ

レオタイプ的」な言語使用に対する学習者の気づきを促すための活動も行った。その活動を通して、イデオロギーと現実の言語使用の差異に対する意識化を試みた。また、比較対象として日本語母語話者である大学生に、「です・ます体」と「普通体」の使用に関する質問紙調査をはじめとして、日本語学習者との活動にも参加を依頼した。

この一連の調査・活動の結果を通して、本稿が提示するのは、(1)「です・ます体」と「普通体」の使用に関する知識や理解を例に、日本語学習者と日本語母語話者が持つ言語イデオロギーの可視化、そして(2)日本語学習者に気づきを促す活動の考察である。

2. 本研究の理論的背景

2.1 です・ます体と普通体

本研究では、日本語の語用論的側面に関する知識と理解を明らかにするための例として、「です・ます体」と「普通体」を取り上げる。従来の日本語文法研究においては、「です・ます体」と「だ・である体」が、そして「丁寧体」と「普通体」が、対として捉えられている（日本語記述文法研究会, 2009）。「です・ます体」は「丁寧体」とも呼ばれるが、スピーチスタイルの観点から言えば、必ずしも「丁寧」であるとは限らず（Okamoto & Shibamoto Smith, 2004）、「丁寧体」という用語が与える誤解を避けるために、本稿では「です・ます体」を用い、「普通体」と対のものとする。

このような日本語の二項対立的な概念・用語に関して説明を補足しておきたい。例えば「です・ます体」は、ポライトネス、あるいはフォーマリティとして従来捉えられてきた。そのことが、「です・ます体」が「丁寧体」と呼ばれる所以でもある。しかしながら、ポライトネスやフォーマリティと関連しているのはむしろ「敬語」であり、「です・ます体」の使用に相当するわけではない。また、昨今の先行研究では、先述のように「です・ます体」の使用は、必ずしもポライトネスやフォーマリティに基づいているわけではないことも指摘されている（Barke, 2011）。

さらに言えば、「1つの言語形式は、1つの機能を持つ」と長らく信じられてきたイデオロギーが、より複雑で動的な現実の言語使用における誤解や混乱を招いているとも考えられる（Okamoto & Shibamoto Smith, 2004）。実際に「です・ます体」と「普通体」は、ある特定の社会的文脈において話者によって使い分けられていたり、1つ以上の機能に基づいて使用されていたりすることが多々ある。

2.2 言語イデオロギーと言語行動

前節で指摘したように、現実の言語使用を理解するのに、一般に広く浸透しているイデオロギーがその理解を混乱させる恐れがある。Silverstein（1979）が定義した「言語イデオロギー

(language ideology)」は、「言語に関連するビリーフであり、言語構造と言語使用が正統化されたものとして、その言語の使用者によって認識されたもの」(p.193)である。そのようなビリーフは、言語話者と社会の関係を決定づける。ジェンダーや年齢、地位などの社会的要因を伴う特定の言語形式の使用や、ポライトネスやフォーマリティに基づいた表現の使用に、言語イデオロギーは関わっている。つまり、「言語は社会的文脈によって決定される」という考えに基づいて選択され使用される言語形式には、言語イデオロギー、すなわちステレオタイプの概念や知識が根付いている。しかし、言語イデオロギーは、現実世界での言語行動に常に反映されているわけではない。

例えば、「です・ます体」か「普通体」のどちらを使用するかを決定するのは、話者自身である (Okamoto & Shibamoto Smith, 2004) と捉えることもできる。「です・ます体」と「普通体」の使い分けは、ある語用論的な目的を達成するために、会話において話者が用いるコミュニケーション・ストラテジーであり、コミュニケーション・ツールとなりえる。このような観点に基づけば、ステレオタイプの概念や知識は時として、日本語学習者に、日常会話に多々見られる「非ステレオタイプの」な使用に注意を払わせないことになり、語用論的側面に関する十分な理解が望めなくなってしまうのである。

2.3 社会構築主義と指標性

本研究では、会話における特定の言語形式の使用は、社会的文脈によって事前に決定されているとは捉えない。むしろ話者が、適切だと考える言語形式を「方略的に」選択しており、その結果として、所与の文脈において社会文化的な意味を示す指標となっている。

このような社会構築主義の観点では、ある言語形式、すなわち指標は、1つ以上の社会文化的意味を示すことがあると見なす。そして、その言語形式によって、社会的アイデンティティや、話者の行為やスタンスが示される (Ochs, 1993)。例えば、話者の「です・ます体」の使用は、会話の参加者間の年齢差に関する知識を示していたり、ビジネスマンや店員としての立場や役割のスタンスを示していたり、依頼という発話行為を示していると考えられる。

このように、話者が「です・ます体」を使用するかどうかを決定する過程は非常に複雑で、「1つの機能のために1つの言語形式を選択する」という単純なものではない。したがって、「です・ます体」や「普通体」をはじめとして、日本語学習者に語用論的側面を指導する際には、多角的に言語使用を捉えるアプローチが求められるであろう。そのようなアプローチに基づく指導によって、学習者は、いつどこでどの形式を用いるか、語用論的により適切に決定できるようになるのではないだろうか。

この多角的なアプローチは、前節でも述べたように、言語形式がコミュニケーション・ツールであるという観点に基づいている。ある特定の言語形式を選択し使用することによって、アイデンティティや関係性を構築したり、ポライトネスや敬意を表したり、社会的・心理的距離

を示したりすることができる（Ikuta, 1983）。コミュニケーション・ツールとしての言語形式は、コミュニケーションの様々な目的を達成するために会話において方略的に用いられるものであり、これまで適切とされてきた社会的文脈や社会文化的意味を指標していなくても、話者自身のコミュニケーションの目的を示すものとなる。

3. 研究方法：イデオロギーと現実の言語使用の差異に対する意識化の活動

冒頭で述べたように、本研究は、日本語学習者と日本語母語話者による「です・ます体」と「普通体」の使用に関する知識と理解を明らかにして、言語使用の語用論的側面に対する学習者の気づきを促すための活動を試みるものである。その活動を通して、イデオロギーと現実の言語使用の差異に対する意識化を図るねらいもある。そのような目的の下、2017年春学期に関西大学の外国語学部在籍する日本人学生3年生と全学部の外国人留学生1年生に協力を依頼し、調査を行った。なお、調査前に協力者から、調査結果は研究発表でのみ使用することの了承を得ていることを付け加えておく。

本研究のために収集したデータは、(1)日本人学生と外国人留学生に対する質問紙調査、(2)日本人学生1名と外国人留学生1名からなるペア・ディスカッション、(3)日本人学生2名と外国人留学生2名からなるグループ・ディスカッション、(4)グループ・ディスカッションを行った協力者に対するフォローアップ質問紙調査である。以下、各データについて詳細を説明する。

3.1 「です・ます体」と「普通体」の使用に関する質問紙調査

この質問紙調査は、日本語学習者と日本語母語話者の、会話における「です・ます体」「普通体」に関する知識や理解を明らかにするために実施したものである。関西大学外国語学部日本人学生3年生（以下、日本人学生）86名と全学部の外国人留学生1年生（以下、留学生）81名の計167名に協力を依頼した。日本人学生は、19歳から49歳（平均20.7歳）の男性12名、女性74名である。留学生の内訳は、18歳から32歳（平均21.3歳）の男性43名、女性38名である。国籍は、中国59名、台湾3名、韓国13名、ベトナム2名、マレーシア2名、インドネシア1名、サウジアラビア1名である。留学生は、調査時において日本語能力試験N1相当の日本語能力を持っており、ディスカッションを行うのに必要十分な日本語を習得していた。

3.2 日本人学生と留学生によるペア・ディスカッション

次に、質問紙に回答した学生の中から、日本人学生4名、留学生4名（中国3名、韓国1名）の計8名に協力を依頼し、日本人学生1名と留学生1名からなる4組のペアを作り、各ペアのディスカッションを実施・録画した。ペア・ディスカッションは、次の手順で進めた。(1)各

ペアで互いに自己紹介し、質問紙の回答を比較する。(2) テレビドラマから抜粋した「です・ます体」と「普通体」の「典型的ではない」使用が観察できる 5 つの場面を視聴する。(3) 各場面において「です・ます体」と「普通体」がどのように用いられているか、またその理由について話し合う。

3.3 日本人学生と留学生によるグループ・ディスカッション

前節で説明したペア・ディスカッションの参加者の中から、日本人学生 2 名、留学生 2 名 (中国 1 名、韓国 1 名) の計 4 名に協力してもらい、1 組のグループ・ディスカッションを行った。グループ・ディスカッションの前に、「です・ます体」と「普通体」の使用について、特に「です・ます体」の使用例 (Cook, 2008; Ikuta, 1983) を紹介した。さらに、言語形式は話者の様々なスタンスを指標するのに用いられていること、例えば、ある場面においてある社会的役割を担っている話者の「オン・ステージ」「オフ・ステージ」を示したり (Cook, 2008)、会話の相手に対する社会的・心理的距離感を表したり (Ikuta, 1983) するということを説明した。その後、テレビドラマの 5 つの場面を振り返り、各場面での「です・ます体」と「普通体」の使用について再考するよう指示した。

3.4 グループ・ディスカッションの参加者によるフォローアップ質問紙調査

グループ・ディスカッションの後、ディスカッションに参加した 4 名の協力者にフォローアップ質問紙調査を実施した。この最後のフォローアップ質問紙調査は、最初の質問紙調査からグループ・ディスカッションに到るまでの一連の活動を協力者に振り返ってもらう教育的目的と、この活動に対する協力者の評価を得るための研究的目的に基づいて行った。

4. 調査の結果と考察

4.1 日本人学生と留学生に対する質問紙調査の結果と考察

本節では、日本人学生と留学生合わせて 167 名に回答してもらった質問紙について、その質問内容とある質問に対する回答結果を説明する。

この質問紙では、まず (1) 協力者の年齢や出身地、日本人学生には留学経験、留学生には母語や日本滞在期間などの背景情報を提供してもらい、次に (2) 会話における「です・ます体」と「普通体」の使用に関する知識を尋ねている。ただし、同じ質問内容であっても、日本人学生と留学生に対して若干異なった方法で尋ねる質問を用意した。本節で考察対象として取り上げる質問の一例を、以下に挙げておく。

〈日本人学生に対して〉

- ・海外からの交換留学生に、標準語における「です・ます体」と「普通体」の使い方につ

いて尋ねられたとしましょう。この2つの形式がそれぞれいつ用いられるかを理解するのに役立つと思う「規則」を書いてください。

〈留学生に対して〉

- 日本語会話で「です・ます体」と「普通体」を使うとき、どのような規則があると教えられましたか。それぞれ説明してください。

4.1.1 「です・ます体」と「普通体」を適切に使用できることの重要性

まず、日本人学生と留学生のどちらにも用意した、同じ内容・文言の質問を取り上げよう。「です・ます体」と「普通体」を適切に用いることがどれほど重要と思っているかを尋ねた質問である。

- 日本語母語話者が、日本社会で適切だと考えられているやり方で、「です・ます体」と「普通体」を使うのは、どのくらい重要だと思いますか。
- 日本語学習者が、日本社会で適切だと考えられているやり方で、「です・ます体」と「普通体」を使うのは、どのくらい重要だと思いますか。

どちらの質問も、まず「とても重要」「重要」「どちらでもない」「あまり重要でない」「全く重要でない」の5段階評価で回答し、次に「なぜそう思うのか」その理由を説明してもらった。

日本人学生と留学生167名のほとんどが、「です・ます体」と「普通体」を適切に使い分けることは「重要」あるいは「とても重要」だと回答している。具体的に言えば、日本人学生の96%が日本語母語話者であれば適切に言語形式を使うことが重要であると考え、73%が日本語学習者も適切に使用することが重要であると考えている。一方で、留学生の93%は、日本人母語話者よりも日本語学習者が「です・ます体」と「普通体」を適切に用いることが重要であると考えていることが明らかになった。

4.1.2 「です・ます体」と「普通体」の使用に関するイデオロギー

先述のように、この質問紙調査の目的の1つは、日本語学習者と日本語母語話者の、会話における「です・ます体」と「普通体」の使用に関する知識と理解を明らかにすることである。留学生には「です・ます体」と「普通体」の使用に関して教えられた規則を書くように求め、日本人学生に対しては「です・ます体」と「普通体」の使用について日本語学習者に尋ねられたと仮定して、それぞれの使い方を説明するのに役立つと思われる規則を自由に記述してもらった。以下、「です・ます体」と「普通体」の使用に関して、留学生と日本人学生の回答結果を比較し考察する。

4.1.2.1 「です・ます体」使用に関するイデオロギー

まず、「です・ます体」の使用について、留学生と日本人学生の回答の上位10項目を、以下の表1にまとめる。

〈表1〉 留学生と日本人学生が考える「です・ます体」を使用する相手、場面や状況

留学生		日本人学生	
1. 目上の人	35%	1. 目上の人	65%
2. 初めて会った人	27%	2. 初めて会った人	51%
3. 先生	20%	3. 丁寧さを示すため	26%
4. 先輩	16%	4. 年上の人	22%
4. 丁寧さを示すため	16%	5. 人混みで	17%
6. 年上の人	14%	6. フォーマルな場面で	15%
7. 知らない人	12%	7. 先生	14%
7. 上司	12%	8. 知らない人	12%
9. スピーチ／プレゼンテーションで	10%	8. スピーチ／プレゼンテーションで	12%
10. 敬意を示すため	9%	10. 職場で	10%

留学生も日本人学生も、「です・ます体」は(1)目上の人、(2)初めて会った人に対して用いるという回答が最も多かった。「目上の人」と回答したのは、留学生が35%、日本人学生が65%いた。「初めて会った人」は、留学生で27%、日本人学生は51%が回答していた。

上記に挙げた「です・ます体」を使用する相手、あるいは場面や状況について、残りの8項目のうちの5つは、留学生も日本人学生も挙げていた。

- 先生 (留学生 20%、日本人学生 14%)
- 丁寧さを示すため (留学生 16%、日本人学生 26%)
- 年上の人 (留学生 14%、日本人学生 22%)
- 知らない人 (留学生 12%、日本人学生 12%)
- スピーチ／プレゼンテーションで (留学生 10%、日本人学生 12%)

留学生と日本人学生が挙げた「です・ます体」の使用に関する規則は、大きく以下の6つの要因に分類できる。

- 相手のアイデンティティ (例：先輩、先生、上司)
- 関係性 (例：家族以外、知らない人、親しくない人)
- 社会的文脈／相互行為のジャンル (例：フォーマル、公的な場、プレゼンテーション)
- コミュニケーション行為の内容 (例：真面目な話、説明、依頼)
- 話し手の態度やスタンス (例：丁寧さや敬意を示すため)
- その他の回答 (例：「いつでも使える」)

「です・ます体」に関してすでに知っている規則などに基づいて、留学生と日本人学生に回答を求めた結果から、以下の点が指摘できるであろう。

- (1) 留学生も日本人学生も、会話の相手が「目上の人」「初めて会った人」である場合、「です・ます体」を使用することを認識している。
- (2) 留学生も日本人学生も、「です・ます体」の使用に関する規則について、同じような社会的文脈に言及しているが、日本人学生の方がより広範囲で多様な使い方を挙げている。そして、日本人学生が挙げた「です・ます体」使用の規則の平均数も、留学生よりも若干多かった（日本人学生：3.31、留学生：2.32）。

4.1.2.2 「普通体」使用に関するイデオロギー

「です・ます体」に続いて、次に「普通体」の使用について、留学生と日本人学生の回答の上位10項目を、以下の表2にまとめる。

〈表2〉留学生と日本人学生が考える「普通体」を使用する相手、場面や状況

留学生		日本人学生	
1. 友人	62%	1. 友人	71%
2. 親しい人	17%	2. 家族	43%
3. 家族	12%	3. 親しい人	29%
3. 立場が下の人	12%	4. 年下の人	17%
5. 同じ立場の人として話すとき	6%	5. 同じ年齢の人	13%
5. 仲の良い人	6%	6. 後輩	12%
7. 同じ立場の人に対して話すとき	5%	7. 日常会話	9%
7. 後輩	5%	8. 心的に距離が近い人	8%
9. クラスメイト	4%	9. 仲の良い人	7%
9. 日常会話	4%	9. 子ども	7%

留学生、日本人学生ともに「普通体」が最も使用されるとしたのは「友人」で、留学生で62%、日本人学生は71%がそのように回答していた。次に多かったのは、「親しい人」（留学生17%、日本人学生29%）、そして「家族」（留学生12%、日本人学生43%）である。

残りの項目のうち、以下の3つは、留学生も日本人学生も「普通体」を使用する相手、場面や状況として挙げていた。

- 仲の良い人（留学生6%、日本人学生7%）
- 後輩（留学生5%、日本人学生12%）
- 日常会話（留学生4%、日本人学生9%）

「です・ます体」同様、回答結果からみた「普通体」使用の規則は、以下の6つの要因に分類

できる。

- 相手のアイデンティティ (例:後輩、年下の人、同じ立場の人、立場が下の人)
- 関係性 (例:友人、家族、親しい人)
- 社会的文脈/相互行為のジャンル (例:カジュアル、私的な場、非公式な場)
- コミュニケーション行為の内容 (例:日常会話、何かを強調したい時、冗談を言う時)
- 話し手の態度やスタンス (例:親しさや友好的な気持ちを表すため)
- その他の回答 (例:「人に話す時」「使うべきでない」)

さらに、「普通体」に関する規則の回答結果から指摘できることは、以下の通りである。

- (1) 「普通体」を使用する会話の相手は「友人」であるとの回答が圧倒的に多かった。
- (2) 留学生も日本人学生も、「普通体」が用いられるべき相手に「親しい人」と「家族」を挙げている。日本人学生は「友人」の次に「家族」を挙げているが、留学生の回答に「家族」が少なかったのは、回答者自身が家族と日本語で会話しないからであろう。
- (3) 「です・ます体」の使用についての回答と同様、「普通体」の使用に関する回答も、留学生よりも日本人学生の方が、会話の相手や立場など、より広範囲で多様な項目を挙げている。また、日本人学生が挙げた「普通体」使用の規則の平均数も、留学生より多かった (日本人学生:2.72、留学生:1.56)。

このように、質問紙調査によって、日本語学習者と日本人母語話者が持つ「です・ます体」と「普通体」の使用に関する知識と理解について明らかになった。この結果が、すなわち日本語学習者と日本人母語話者にあるイデオロギーを表していると捉えてよいだろう。全体的に言えば、「普通体」よりも「です・ます体」の使用に関する規則数の方が多く挙げられており (です・ます体:4.73、普通体:3.60)、この結果も、冒頭で触れたように、日本語教室では「丁寧でフォーマルな形式や表現が優先的に指導されている」ことを支持するものとなっている。

4.2 ペア・ディスカッションの結果と考察

3章の研究方法で述べたように、留学生と日本人学生合わせて8名が4組のペアになり、「です・ます体」と「普通体」の使用についてディスカッションしてもらった。初対面であるため、まず互いに自己紹介してから、テレビドラマ『元カレ』(TBS, 2003年放送)から抜粋した5つの場面を視聴した。その後、それらの場面で使用されている「です・ます体」と「普通体」について、自由に話し合うよう指示した。以下の表3に、ペア・ディスカッションの協力者が視聴した5つの場面を簡単に説明する。

〈表3〉「です・ます体」「普通体」の非ステレオタイプの使用（TBS『元カレ』より）

場面1	家族の会話	主人公・東次の家族が食卓を囲み話をしている。東次の弟・裕二は、父親に家の手伝いをするように言われる。父親に対して、裕二は「普通体」で返答し、大学入試の受験勉強をしている自分に夏休みはないので、手伝えないと言う。しかし、母親が夏休みに家族で温泉に行くことを提案すると、父親は「裕二は勉強しなければならないので行けない」と返す。すると、裕二は「です・ます体」で、「受験生でも夏休みは必要だ」と主張する。
場面2	デパートとラーメン屋	ある客が飼い犬をデパートの食品売り場に連れてくる。デパートのスタッフは、「です・ます体」を用いて、売り場では犬の出入りが禁止であることを丁寧に伝える。次に、ラーメン屋の店長と客の間で似たようなやり取りが続く。ラーメン屋では客の携帯が鳴ると、店長は「普通体」を用いて、店では携帯の使用が禁止であることを伝え、外で話すように客に言う。
場面3	自己紹介	東次と元彼女である真琴は、同じデパートで一緒に働くことになる。別れてから初めて再会した時には、他の従業員もいたため、初対面であるかのように「です・ます体」で互いに自己紹介する。その後、エレベーターで偶然会った時は、周りに誰もおらず、互いに「普通体」で話している。
場面4	職場	真琴は、東次と復縁したいと思っているが、東次にはすでに新しい彼女がおり、真琴とやり直す気はない。真琴は東次に近づき、親しげに「普通体」で仕事の様子を尋ねるが、東次は「です・ます体」を使って返答し、全て計画通りに進んでいることを伝える。その後は、真琴も東次に対して「です・ます体」を用いて会話する。
場面5	先輩と後輩	千歳は東次と同じ大学の先輩である。千歳の方が年上だが、職場では東次が千歳の上司である。東次は千歳に対して普段「です・ます体」を使っている。この場面は、千歳が仕事でトラブルに巻き込まれ、ある日職場に現れなかったところから始まる。家にいた千歳に対し、東次は仕事に行くように説得するが、千歳が断ると、東次は腹を立て千歳に対し「普通体」を使用する。

これらの5つの場面について、4組のペアがディスカッションした際の録画データから、話題に上った興味深い主要な点をまとめ、以下に示す。

〈ペア1〉

- 場面2のラーメン屋の店長が客に対して「普通体」を使っているのは、店長が年長者であることもあって、ある程度は許容範囲なのではないだろうか。別の見方をすれば、店長が「普通体」で話すことで、客との間に親しい雰囲気を作り出し、店長も客もそのようなやり取りを楽しんでいるように思う。（留学生）
- どんな店であっても店員とは「です・ます体」を使う。ただし、同じ店に何度も通って店員と知り合いになれば、普通体を使うようになるかもしれない。場所や相手が同じであっても、「です・ます体」と「普通体」の使い分けは、時間とともに変化する可能性が

ある。(日本人学生)

- 「です・ます体」と「普通体」は公的な場と私的な場で使い分けるものだと思っていたが、場面4を観ると、職場での同僚との社会的・心理的距離を適切に表す手段として会話で用いられることも、日本社会においては重要であることを理解した。(留学生)
- 場面5で、東次が千歳に話している途中で話し方を「です・ます体」から「普通体」へ変化させたのは、東次の感情の高まりを表しているようだ。逆に、会話の途中で急に「普通体」から「です・ます体」に変わった場合も、話者の感情の変化を示していることになるのだろう。(日本人学生)

〈ペア2〉

- 場面2のラーメン屋の店長の「普通体」の使用は、デパートとは異なり、ラーメン屋という店の親しみやすさを生み出すのに役立っている。(留学生)
- 場面3で、別れてから初めて会った時の東次と真琴が「です・ます体」を使っているのは、その時のお互いの戸惑いを表現しているのではないだろうか。中国語には「です・ます体」に相当する言語形式がないため、そのような気持ちを表現する場合は、他の方法を用いることになるだろう。(留学生)
- 場面4を観て考えたのは、もし恋人同士の間で「です・ます体」を使ったとしたら、その理由がわからず心配したり不安になったりするだろう。(留学生)
- 場面5で、先輩である千歳に対して、東次が「です・ます体」から「普通体」へ変化させたのは、千歳に自分の気持ちを伝えるために感情が高ぶっていたため、「です・ます体」を使うのを瞬間的に忘れたからではないだろうか。(日本人学生)

〈ペア3〉

- 場面1で、父親に対して息子の裕二が「です・ます体」を使ったのは、わざと冗談を言っているからだと思った。「です・ます体」は職場やフォーマルな場面で用いられるもので、「普通体」は相手との距離を縮めるために用いられると理解していた。(留学生)
- 日本のどんな店でも「普通体」は使われないと思っていたが、場面2のラーメン屋で「普通体」が使われているので、今度ラーメン屋に行ったときに注意して観察したい。(留学生)
- 場面5のように、話者が自分の気持ちを表現したいときや、他人の気持ちにあまり配慮していないときに、「普通体」が使われてもいいことがわかった。(留学生)

〈ペア4〉

- 場面1の裕二による「です・ます体」の使用は、父親が言ったことに反対するため、裕二の主張が感じられる。同時に、裕二がそのようなやり取りを面白くしているように

も思える。（日本人学生）

- 場面2については、客に呼びかけるときのラーメン屋の店長の「普通体」使用の理由として、(1) 店長が年長者であること、(2) 店が小さいこと、(3) ラーメン屋であることなどが関連していると思う。さらに言えば、店長の性格の強さも示している。一方、デパートにおける「です・ます体」の使用は、あたかも社会的地位の高い人であるかのように客に対応することが前提となっているようだ。（留学生、日本人学生）
- 場面4で、最初に東次に話しかけたときの真琴の「普通体」の使用は、2人の間の心理的距離を縮めようという欲求を表しているのではないだろうか。しかし、真琴の試みは、距離を保とうとする「です・ます体」を使った東次によって拒絶されており、「です・ます体」があまり近づきたくない人との間の距離を保持するのに用いられているのがわかる。（日本人学生）
- 場面5で、東次が千歳に怒ったときの「普通体」の使用は、東次の感情と本音が強く表れた結果なのだろう。（留学生）

以上、4組のペア・ディスカッションから、特筆すべき内容をまとめたものを提示した。これらから言えることは、「です・ます体」と「普通体」が「非ステレオタイプ」的に用いられているテレビドラマのいくつかの場面を観て、留学生と日本人学生がディスカッションした結果、多少なりとも何らかの気づきを得ていることである。これまで考えもしなかったことに気づいたり、すでに知っていることを振り返り再認識したりする認知的作業が行われていると言える。

4.3 グループ・ディスカッションの結果と考察

ペア・ディスカッションの後、4名1組のグループ・ディスカッションを行った。グループ・ディスカッションにおいて、「です・ます体」と「普通体」使用に関して、留学生と日本人学生によって話し合われた内容から、特筆すべき点を以下にまとめる。

- 企業や会社などでは、役割や関係性が明確に定義されているように、大学の部活動なども先輩に対する「です・ます体」の使用が厳格に固守される傾向がある。上下関係の規則が厳しくない組織であれば、年上の人でも心理的な距離が近い場合、「です・ます体」ではなく「普通体」を用いても、それほど失礼にならないこともあるのではないかな。
- テレビドラマで観たデパートとラーメン屋で異なる言語形式が用いられているように、ホテルやコンビニなどのスタッフに用いられる言語形式もおそらく異なるのだろう。言語形式の選択は業種によっても決定されるのではないかな。
- 日本では、職場の同僚とプライベートで親しい関係を持つことが認容されないことがある。そのため、職場では「です・ます体」をはじめとして、ある特定の言語形式を保持することによって、関係を隠すことがある。また、その逆に、同僚と親しいふりをして

いても、親しいわけではない場合もあるかもしれない。

- クラスメイトとは社会的に同じ立場であるため、互いに「普通体」を使用することがデフォルトだと思われる。しかし、あまりよく知らないクラスメイトに対して距離感を示す場合は、別の方法を取ることになる。例えば、プライベートな話をするのを避けたり、自分の意見を述べるのを控えたりするやり方である。
- 言語形式は話者自身のアイデンティティに基づいて選択されるという前提があれば、会話の相手もそのような前提に基づいて解釈するであろう。テレビドラマの東次と真琴の会話の場面を観て考えたのは、恋人が外国人だとして、それほど日本語が上手でなければ、「です・ます体」と「普通体」が適切に使用されなくても単なる間違いだろうと解釈して、それほど気にはならないだろう。しかし、日本語が上手な外国人の恋人であれば、「です・ます体」で話されたとき、何らかの理由で距離を置こうとしていると解釈することもあり得る。
- 「普通体」の使用は、関西弁の使用と似ているのではないだろうか。関西弁を使うときは、標準語を使うときよりもカジュアルな場や私的な話の内容と関係しているように思われる。また、本学の教室内や授業では関西弁が用いられているが、スピーチやプレゼンテーションの場面では標準語が使用されるなど、どの言語形式やスタイルが用いられるかは、特定のイベントによっても異なるのかもしれない。
- 話者がある言語形式を選択する際、会話の相手が用いる言語形式に影響を受けることが多いのではないか。例えば、留学生対象のクラスでは、留学生のほとんどが標準日本語を学んできているため、標準語で授業が行われるだろう。

4.4 フォローアップ質問紙調査の結果と考察

グループ・ディスカッションの直後、協力者4名にフォローアップ質問紙への回答を依頼した。質問紙調査、テレビドラマ視聴、ペア・ディスカッション、グループ・ディスカッションといった一連の活動を通して、「です・ます体」と「普通体」の使用に関する理解に何か変化が生じたか、また、かれらが今後「です・ます体」と「普通体」の使い方を変化させようと考えるかどうかを明らかにするためである。以下、協力者の回答を、フォローアップ質問紙調査の質問とともに提示する。

質問1: この調査に参加して、会話における「です・ます体」と「普通体」に対する理解が何か変わったと思いますか。「はい」の場合、どのような点で変わったと思いますか。

留学生も日本人学生もこの質問に対して「はい」と回答している。

留学生のコメントは、以下の通りである。

- 息子が父親に話すときに、心理的な距離感を出すために、「です・ます体」を意図的に用

いたことには気づかなかった。

- 気持ちや感情を表すために、年上の人と話す場合でも「普通体」が用いられることに気づいていなかった。「です・ます体」が相手との距離を作るのに、故意に用いられることにも気づいていなかった。

日本人学生のコメントは、以下の通りである。

- 年上の人だけでなく同級生であっても、初めて会った時には「です・ます体」を使っていることに気づいた。
- 「です・ます体」の使用が、ある特定の状況における雰囲気を作り出したり、話し手と聞き手の間の距離を作ったりできることを知った。

質問2：この調査に参加して、今後、自分の「です・ます体」と「普通体」の使い方が変わると思えますか。「はい」の場合、どのようなところが変わると思えますか。

どちらかと言えば、この質問は留学生に向けられたものであった。留学生2人と日本人学生のうち1人が「はい」と回答している。

留学生の回答は、以下の通りである。

- 心理的な距離が近ければ、先生に対して「普通体」を使って話しても問題ないのではないかと感じた。
- 今後、自分の気持ちを強く表現したいときは、「普通体」を使おうと思う。

この質問に「はい」と答えた日本人学生は、以下のように述べている。

- 海外ではそのような区別がないだろうから、留学生と話すとき、「普通体」を使っても問題ないと思っていた。しかし、話し合いをしていて、留学生の何人かが失礼にならないように、私に「です・ます体」を使うようにしているのに気づいた。留学生と話しているからという理由だけで「普通体」を使うのは失礼であるということにも気づいた。

質問3：何か付け加えたいことがあれば…

最後の質問は、この調査に関して、質問への回答以外に何か述べておきたいことがあれば記述する機会を協力者に与えたものである。

留学生の1人が疑問に感じていることを、次のように書いている。(1) SMSのテキストなど、文字で書く場合の「です・ます体」と「普通体」の使用には例外的なものがあるのか、(2) 「です・ます体」を使用することが求められている特定の社会集団で「普通体」を使用するとどうか、という疑問である。留学生が感じた疑問についての考察は別稿に譲るとして、一連の調査（活動）の結果、留学生が以前はそれほど深く考えていなかった状況での「です・ます体」と「普通体」の使用に関心を持つようになったことが窺える。

日本人学生の1人もまた、以下のように回答している。

- 私の使い方が変わったかどうかはわからないけれど、コミュニケーションのスキルを向上させるために、どのように話して、どのように形式を使うかをもう少し考えるつもりだ。さらに、「です・ます体」とその使用について、留学生がどう考えているかについてもっと知ることができたので、留学生とのやり取りでは、今回学んだことを生かしていきたい。

上記の質問2で日本人学生が述べているように、この活動自体が、実際の言語形式の選択を意識化させ、参加者の気づきを促していることが窺える。このように、一例として「です・ます体」と「普通体」の使用を取り上げてみたが、活動を通して、言語形式は「丁寧か丁寧ではないか」「フォーマルかフォーマルではないか」といった判断基準で選択されているのではなく、会話に臨む話者のスタンスによって決定されていると理解できるようになる。留学生も日本人学生も「です・ます体」と「普通体」の使い分けについて考え、それらが持つ機能についての知識や理解を深めていることから、研究データとしてだけでなく、この調査・活動の教育的側面も検討できたと考えよう。

5. おわりに：学習者の語用論的能力育成につながる活動の可能性

以上、日本語学習者と日本語母語話者による「です・ます体」と「普通体」の使用に関する知識と理解を調査し、学習者の語用論的能力育成を可能にする活動を調査の一環として行った。「非ステレオタイプの」な言語使用に注目することで、活動を通してイデオロギーと現実の言語使用の差異に対する意識化を図った。

留学生も日本人学生もペア・ディスカッションやグループ・ディスカッションを通じて気づいたこととして、(1) 自分が所属する集団にとって「です・ます体」と「普通体」が適切に用いられることが重要であること、(2) 「です・ます体」と「普通体」の使用が言語イデオロギーと密接に関連していること、(3) 社会的文脈と会話の相手との関係性が考慮された上で言語形式が選択されるだけでなく、話者が主体的に方略的に選択していることを挙げている。

本研究の目的の1つであった「です・ます体」と「普通体」の使用に関する知識や理解の調査結果を通して、日本語学習者と日本語母語話者が持つ言語イデオロギーは、本稿を通して提示できたであろう。また、もう1つの目的であった「日本語学習者に気づきを促す活動」についても、ある程度は考察できたであろう。本研究が、日本語学習者の語用論的能力の育成につながる活動の開発に貢献することを期待し、今後も引き続き検討を重ねていきたい。

参考文献

- 清水崇文（2018）『コミュニケーション能力を伸ばす授業づくり—日本語教師のための語用論的指導の手引き—』東京：スリーエーネットワーク
- 日本語記述文法研究会（2009）『現代日本語文法 7—談話・待遇表現—』東京：くろしお出版
- Barke, A. (2011). Situated (im)politeness and the use of addressee honorifics in Japanese television dramas. In B. Davies, A. Merrison & M. Haugh (Eds.), *Advances in sociolinguistics* (pp. 111-128). London: Continuum International Publishing Group.
- Cook, H. M. (2008). Style shifts in Japanese academic consultations. In J. Kimberly & T. Ono (Eds.), *Style shifting in Japanese* (pp. 9-38). Amsterdam: John Benjamins.
- Ikuta, S. (1983). Speech level shift and conversational strategy in Japanese discourses. *Language Science*, 5, 37-53.
- Ishida, K. (2009). Indexing stance in interaction with the Japanese desu/masu and plain forms. In N. Taguchi (ed.), *Pragmatic competence* (pp. 41-67). Berlin: De Gruyter Mouton.
- Iwasaki, N. (2011). Learning L2 Japanese “politeness” and “impoliteness”: Young American men’s dilemmas during study abroad. *Japanese Language and Literature*, 45, 67-106.
- Jones, K., & Ono, T. (2005). Discourse-centered approaches to Japanese Language Pedagogy. *Japanese Language and Literature*. 39(2), 237-254.
- Kasper, G. (1997). Can pragmatic competence be taught? (NetWork #6) [HTML document]. Honolulu: University of Hawaii at Manoa, Second Language Teaching & Curriculum Center.
Retrieved from <http://www.nflrc.hawaii.edu/NetWorks/NW06/>
- Ochs, E. (1993). Indexing gender. In M.D. Miller (ed.), *Sex and gender hierarchies* (pp. 146-169). Cambridge: Cambridge University Press.
- Okamoto, S., & Shibamoto Smith, J. S. (2004). Introduction. In S. Okamoto & J. S. Shibamoto Smith (Eds.), *Japanese language, gender, and ideology: Cultural models and real people* (pp. 3-20). Oxford: Oxford University Press.
- Silverstein, M. (1979). Language structure and linguistic ideology. In P. R. Clyne, W. F. Hanks, & C. L. Hofbauer (Eds.), *The elements: A parasection on linguistic units and levels* (pp. 193-247). Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Taguchi, N. (2009). *Pragmatic competence*. Berlin: Mouton de Gruyter.

